

風呂鍬小攷

小野 恭 一

はじめに

このほど筆者は、令和二年度の黎明館企画展「蒔く・穫る・耕す―かごしまの農具―」を担当する機会に恵まれ、鹿児島県内各地で使用された一・二・三点の農具をはじめ、雲谷等薩や木村探元の描いた「四季耕作図」、島津重豪が編纂させた農業技術書『成形図説』などの資料を展示した^①。

展示会を準備していた令和二年四月当時、新型コロナウイルス感染症の流行のため、政府による緊急事態宣言の対象地域が全国に拡大された。そのため、館外での資料調査が困難となり、館内の収蔵資料を中心に展示を計画せざるを得なかった。幸い、当館は鹿児島県内全域から収集した豊富な民俗資料を所蔵しており、農具に限っても約一五〇〇点もの資料を収蔵していることから、これらの資料を収蔵庫内で調査しながら企画を練り上げることにした。

当館収蔵の民俗資料は、その大部分が当館建設の際に収集された資料である。昭和四十三（一九六八）年から同五十六（一九八一）年までの十四か年にわたり、当館で展示・収蔵する民俗資料収集のため、鹿児島民俗学会などの協力を得て、県内全域で基礎調査が行なわれた^②。調査では、資料一点ごとに「資料調査報告カード」が作成され、所有者、使用方法、法量、簡易の実測図、使用者からの聞き取り、資料の写真などの情報が、裏表一枚のカードにまとめられた。このカードは、個人情報保護の観点から公開されてはならないが、当館に保管されておき、収蔵資料の基本情報を補う貴重な情報源となっている。

筆者は、小野重朗や下野敏見ら先学の蓄積してきた先行研究^③に学びつつ、農

具の地域的特色や型式の違い、農具の改良と発達、伝播と普及に注目し、カードを参照しながら、改めて一点ずつ資料の法量を測り直し、資料を比較することから調査を開始した。本稿は、筆者が収蔵資料を調査する中で確認できた風呂鍬の地域性について、若干の考察と見解を述べたものである。

一 風呂鍬と実測方法

さて、最も基本的な農具の一つである鍬は、田、畑を問わず、耕起、畝立、除草、中耕、イモ類の収穫などいろいろな農作業の場面で使用される。そのため、風呂鍬、唐鍬、備中鍬、手鍬など、その種類や名称も豊富で、用途に応じていろいろな形状の鍬が生み出されてきた^④。鍬を分類するとき、その機能や構造から分類することができる。機能からは、田畑の荒起こしや開墾で深く耕す「打ち鍬」、畦づくりなどで浅く土を削って移動させる「引き鍬」、その中間的な「打引き鍬」の三つに分けられ^⑤、構造からは、「風呂」と呼ばれる木製の「台」の有無によって風呂鍬と風呂無鍬の大きく二つに分けられる。風呂鍬は、台に柄と鍬先（刃）を装着し、風呂無鍬は、直接鍬先（刃）と柄を接合する構造となっている^⑥。

本稿で検討の対象とする風呂鍬は、鹿児島県内では主に「オデグワ」、「ヒラグワ」、「ヘラグワ」等と呼ばれているもので、名称の「オデ」や「ヒラ」、「ヘラ」は、いずれも風呂鍬の構造上の特徴ともなっている台に由来する。このほかに「ノウチグワ」、「ママシノピンタ」の呼称もある。「ノウチグワ」は、「野

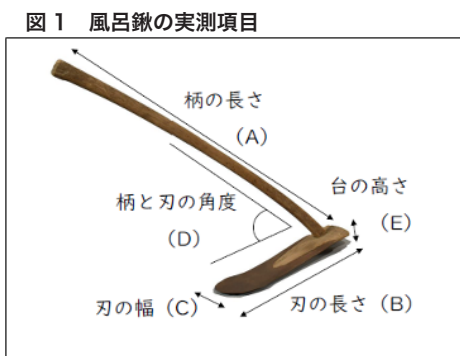
を打つ鋏」の意であり、「マムシのビンタ」は、刃の先端の形状が丸いものでマムシの頭（方言でビンタ）のように見えることから付けられた名称である。^⑦

当館には、このような風呂鋏が完形のもので四十八点収蔵されている。^⑧

一見同じ風呂鋏でも、柄や刃の長さ、柄と刃の角度、刃の先端の形状等に違いが見られる。これらの違いは、一般的にも土壌の性質、作業動作、用途などの違いに起因することが知られている。また、「肥後鋏」や「天草鋏」などの地域名を冠する風呂鋏もあって、生産、使用地によって特徴が見られる。

そこで、筆者は、県内の風呂鋏にも土地の実情を反映した地域性を読み取ることができないのではないかと考え、資料の実測を試みた。当館収蔵の風呂鋏は、県内のほぼ全域を網羅し、地域ごとに数点の資料を集めているため、資料の比較分析に耐えると判断した。

資料の実測に当たり、図一に示したように、A～Eの項目を設け、以下の基準で計測を行なった。^⑨



- A 柄の長さ。資料を側面から見て、柄の上辺が台と接する部分の端から柄の先端を直線で結んだ長さを計測した。
- B 刃の長さ。刃の先端から台の後端までの長さを計測した。
- C 刃の幅。幅の最大値を計測した。
- D 柄と刃の角度。刃先の前方部を床面と水平に置き、柄の付け根の中央部の角度を、建築用勾配目盛を使用して計測した。
- E 台の高さ。台の後端部分を計測した。

この他、刃の先端の形状や柄の握り、柄の底の台から下への突出といった資料の特徴についても把握に努めた。^⑩

二 黎明館収蔵の風呂鋏

実測結果を整理すると、表一のとおりである。ここでは、実測をとおして筆者が読み取った種子島、長島の地域の風呂鋏の特徴について紹介したい。

(一) 種子島地域の風呂鋏

まず、種子島の風呂鋏について見てみたい。種子島は、現在の行政区分上、西之表市、中種子町、南種子町の三市町からなる。この地域の風呂鋏は、完形のもの十五点を収蔵しており、比較的その特徴をつかみやすい（整理番号1～15）。

表中の大枠内の数値に注目すると、柄の長さ（A）は、約100～125センチメートルと長い。県内の他の地域のものにも100センチメートルを超える長さのものはあるが、種子島の風呂鋏は、凡そ100センチメートル以上の長さの柄をもつ特徴が読み取れる。

また、柄と刃の角度（D）は、四十～五十度と大きい。県内の他の地域のもの、後述する長島の風呂鋏などを除いて、凡そ三十～四十度であるのに対して、比較的角度が大きいことが読み取れる。

この他、台の高さ（E）も四センチメートル以上のもので多く、刃の先端の形状は全てマムシ頭型であり、柄に握りのあるものが多いことが読み取れる。

以上のような種子島の風呂鋏の特徴は、すでに先行研究においても指摘されている。下野敏見は、種子島の風呂鋏は独特の形態と機能の鋏であると示し、その特徴を「大きくて、柄入の台木の部分が固くて重い」、「鋏の鉄部分の長さは六〇センチ以

図2 種子島の風呂鋏（整理番号11）



表1 黎明館所蔵の風呂鍬

整理番号	台帳番号	資料名 (資料固有の名称)	使用地域	柄の長さ (A)	刃の長さ (B)	刃の幅 (C)	柄と刃の 角度 (D)	柄に対する刃 の長さの比率 (B÷A)	台の高さ (E)	備考1 刃先端の形状	備考2 柄の握り	備考3 柄底の台か らの突出
1	1785	ヒラグワ	西之表市西之表	104.0	57.0	14.0	40	55%	5.4	マムシ頭型		0.2cm
2	1861	ヒラクワ	西之表市西之表	106.0	59.5	16.0	40	56%	6.4	マムシ頭型		
3	1864	ヒラクワ	西之表市西之表	105.7	59.5	17.0	42	56%	4.2	マムシ頭型	握り有	0.1cm
4	1868	ヒラクワ	西之表市西之表	103.3	59.5	13.0	45	58%	4.9	マムシ頭型		
5	1899	ヒラクワ	西之表市安城	124.9	59.0	20.0	50	47%	4.5	マムシ頭型		0.3cm
6	1900	ヒラクワ	西之表市安城	123.2	56.0	17.5	45	45%	4.0	マムシ頭型		
7	1940	ヒラクワ	西之表市安城	103.1	54.5	19.0	47	53%	4.7	マムシ頭型	握り有	0.2cm
8	2112	ヒラグワ	西之表市現和	113.3	58.0	15.0	42	51%	4.6	マムシ頭型	握り有	0.6cm
9	2092	ヒラグワ	西之表市現和	112.3	59.0	17.0	45	53%	4.3	マムシ頭型	握り有	0.6cm
10	2068	ヒラグワ	西之表市現和	116.0	56.0	15.0	45	48%	4.0	マムシ頭型	握り有	
11	1946	ヒラクワ	西之表市古田	120.4	57.0	17.5	46	47%	4.1	マムシ頭型	握り有	0.5cm
12	4128	ノウチグワ	中種子町油久	103.3	55.5	16.5	45	54%	4.1	マムシ頭型		0.3cm
13	4141	ノウチグワ	中種子町田島	104.2	55.0	15.0	44	53%	4.9	マムシ頭型	握り有	
14	2172	ヒラグワ	南種子町西之	107.0	55.5	15.0	42	52%	4.7	マムシ頭型		
15	2133	ヒラグワ	南種子町茎永	99.0	50.0	16.5	45	51%	2.7	マムシ頭型	握り有	0.3cm
16	556	ヘラ鍬	肝付町(旧高山町)新富	89.6	54.0	13.0	35	60%	2.4			0.3cm
17	4222	エッチュウグワ	鹿屋市串良町下小原	89.2	53.4	13.0	33	60%	2.2			0.1cm
18	4339	クワ(オデグワ)	鹿屋市串良町上小原	86.2	54.5	14.0	35	63%	2.8			
19	407	オデグワ	鹿屋市輝北町上百引	93.0	57.0	16.0	35	61%	3.1	マムシ頭型		0.2cm
20	530-1	オデ鍬	垂水市新御堂	90.0	53.0	11.0	30	59%	2.5			
21	2577	ヘラグワ	指宿市開聞仙田	97.0	70.2	9.0	33	72%	2.8			
22	4352	鍬(イタグワ)	指宿市十二町	103.0	69.0	11.5	35	67%	3.3			
23	103	オデクワ	南九州市知覧町郡	95.0	51.5	12.5	30	54%	2.8			
24	1053	ヒラグワ	日置市吹上町入来	88.0	53.5	11.5	33	61%	2.7			
25	376	オデグワ	鹿児島市吉田町	96.0	56.0	11.5	34	58%	2.6			0.4cm
26	2232	オデグワ	始良市蒲生町漆	83.0	49.5	12.0	35	60%	2.7			0.1cm
27	913	オデ鍬	霧島市隼人町見次	91.7	52.0	13.0	40	57%	2.4			0.1cm
28	691	オデグワ	伊佐市大口篠原	101.2	52.0	9.2	32	51%	3.1			
29	1015	オデグワ	伊佐市大口宮人	98.3	57.0	10.5	30	58%	3.0			1cm
30	1103	オデグワ	さつま町(旧宮之城町)山崎	97.0	61.0	11.5	31	63%	2.4			
31	964	オデクワ	さつま町(旧鶴田町)神子	95.0	60.0	12.0	35	63%	2.5			0.8cm
32	934	オデクワ	さつま町鶴田	101.0	66.0	12.0	30	65%	2.8			0.6cm
33	1134-1	オデグワ	薩摩川内市入来町副田	106.7	65.0	12.0	33	61%	3.4			0.8cm
34	1134-2	オデグワ	薩摩川内市入来町副田	97.0	56.5	10.5	35	58%	2.7			1.0cm
35	1201-1	オデグワ	薩摩川内市入来町浦之名	97.0	47.2	10.0	35	49%	3.2			0.8cm
36	1201-2	オデグワ	薩摩川内市入来町浦之名	98.2	61.5	12.0	38	63%	3.3			
37	1152	オデクワ	薩摩川内市樋脇町市比野	98.0	64.5	11.5	35	66%	3.1			0.3cm
38	1166	オデグワ	薩摩川内市樋脇町倉野	86.5	55.0	12.0	37	64%	2.5			0.8cm
39	1158	オデグワ	薩摩川内市樋脇町塔之原	60.0	51.0	17.0	38	85%	3.9			1.2cm
40	4176	オデグワ	薩摩川内市東郷町山田	94.5	61.0	11.5	25	65%	3.2			0.7cm
41	703-1	オデグワ	薩摩川内市(旧川内市)水引町	91.5	51.0	12.5	30	56%	2.5			0.2cm
42	703-2	オデグワ	薩摩川内市(旧川内市)水引町	99.0	58.0	11.5	31	59%	2.9	マムシ頭型		0.1cm
43	63	ヒラクワ	薩摩川内市上甕町瀬上	56.0	60.0	16.0	15	107%	3.4	マムシ頭型		0.7cm
44	2401	オデグワ	出水市上知識町	94.5	55.0	12.0	31	58%	3.2			0.6cm
45	3526	ヒラクワ	長島町(旧東町)獅子島	72.5	59.0	10.5	25	81%	2.7			1.5cm
46	3613	ヒラグワ	長島町(旧東町伊唐)鷹巣	73.6	62.5	10.5	23	85%	2.5			1.3cm
47	3614	ヒラグワ	長島町(旧東町伊唐)鷹巣	74.5	65.0	9.0	28	87%	3.3			1.9cm
48	1511	イタグワ	熊本県天草市(旧牛深市)久玉町	76.0	57.0	10.0	19	75%	2.9			2.0cm

上もあり、柄の長さは人によって違うが一〇〇センチ以上の長さで、柄の上端は滑り止めのコブがついている」、「鍬先が光り、亀頭状に横がふくらみ、そこは鋭く光っていて、草や小さい木の根などを切れるようになってい」と捉える。また、水流郁郎も「柄の上端には滑り止めのコブがついているのも種子島の特徴であるように思える」と述べる。これらの特徴は、下野が指摘するように、この風呂鍬が原野を開墾する「アラキ打ち」に使用されることと関係し、打ち込んで赤粘土質の土と芝草や茅などの草の根を切る作業に適している。そして、風呂鍬を使用する動作も独特である。

(二) 長島地域の風呂鍬

次に、資料点数が種子島ほど多くはないが、長島地域の風呂鍬について見てみたい。長島地域は、鹿児島・熊本両県にまたがる天草諸島のうち、長島・伊唐島・諸浦島、獅子島などの島々からなる地域で、東町と長島町が合併して、現在の長島町となっている。この地域の風呂鍬は、当館に三点収蔵されている(整理番号45〜47)。

表中の太枠内の数値に注目すると、柄の長さ(A)が七十センチメートル程度と短く、柄と刃の角度(D)も二十三〜二十八度と小さい。また、柄に対する刃の長さの比率が大きく八十パーセントを超え、柄の底が約一センチメートル以上突出してい

図3 長島の風呂鍬（整理番号 45）



る傾向が読み取れる。

そして、この傾向は、熊本県天草地域の風呂鍬（整理番号48）にも共通する。

先行研究によれば、熊本県の宇土半島や長崎県の島原半島など不知火海周辺地域でも、同様の風呂鍬が使用されていることが指摘されている。小野重朗は、長崎県南高来郡国見町（現・長崎県雲仙市）の「ヒラグワ」と呼ばれる風呂鍬を例に、刃は幅が狭く長く、柄が短く、柄の角度が小さいなどの特徴を示し、このような風呂鍬が「天草上島から宇土半島、島原にかけてひろく見られる」とする¹⁵⁾。

向山勝貞は、上記の小野の指摘を踏まえ、長島地域の風呂鍬について、「このような特色を持った鍬は、『天草鍬』『肥後鍬』といわれ、長崎県（島原）、佐賀県、熊本県（宇土、天草）、鹿児島県（長島）等不知火海周辺地域に分布している」とする¹⁶⁾。

実は、長島地域と熊本県天草地域の風呂鍬の、柄の長さが短く、柄と刃の角度が小さく、柄に対する刃の長さの比率が大きい傾向は、風呂鍬に限られたものではない。参考として当館収蔵の備中鍬の実測結果を表二に掲げる¹⁷⁾。表二を見ると、「ミツマタグワ」と呼ばれる備中鍬（整理番号61・62）にも、先に確認した傾向が読み取れる。

この形の備中鍬について、小野重朗は、「熊本より長島をへて甕島にいたるまで、この三マタ、二マタの長い刃の鍬がよく用いられている。主として田の仕事やイモホリなどに用いる。土地が重い事が原因かもしれない。柄となす角度は小さく、柄はみじかく、かがんで用いる点も熊本系の鍬によく似ている」と述べ、熊本から長島、甕島の備中鍬の分布と型式・使い方の共通性を指摘する¹⁸⁾。小野の指摘は表二（整理番号60・74・75）からも読み取ることができる。

表2 黎明館所蔵の備中鍬

整理番号	台帳番号	資料名 (資料固有の名称)	使用地域	柄の長さ (A)	刃の長さ (B)	刃の幅 (C)	柄と刃の角度 (D)	柄に対する刃の長さ の比率 (B÷A)
49	2323	ミツマタゴイチ	与論町麦屋	82.6	25.0	20.0	74	30%
50	2608	ミチマタゴイ	和泊町内城	71.0	27.0	19.0	70	38%
51	3146	ミツマタ	和泊町	96.6	36.0	22.6	68	37%
52	3156	ミチマタ	徳之島町母間	97.0	39.0	16.5	58	40%
53	3069	ミツマタ	天城町西阿木名	96.5	31.5	16.0	60	33%
54	2596	ミツマタ	瀬戸内町古仁屋	93.0	36.0	17.0	60	39%
55	3976	サンカ	十島村口之島	102.6	25.0	14.0	60	24%
56	2102	ミツマタ	西之表市現和	95.1	28.5	14.2	77	30%
57	1454	ミツマタ	枕崎市西鹿籠	82.7	28.0	15.5	73	34%
58	4340	ミツマタグワ	鹿児島市（旧松元町）上谷口町	92.1	24.0	16.2	79	26%
59	4216	ミツマタグワ	霧島市国分下井	101.1	39.5	14.0	40	39%
60	3363	ミツマタ	薩摩川内市里町里	77.3	39.0	11.5	38	50%
61	3552	ミツマタグワ	長島町（旧東町）獅子島	68.0	31.5	11.5	40	46%
62	1512	ミツマタグワ	熊本県天草市（旧牛深市）久玉町	65.2	40.0	10.5	28	61%
63	3147	フタマタ	和泊町	97.0	35.5	11.0	67	37%
64	2632	フタツマタ	和泊町和	93.2	35.9	10.9	67	39%
65	3121	ふたつまた鍬	伊仙町馬根	100.2	31.5	12.0	62	31%
66	3087	ふたつまた鍬	伊仙町阿三	88.0	31.5	12.0	70	36%
67	3157	タチマタ	徳之島町母間	97.5	38.5	11.7	56	39%
68	2585	フタマタ	瀬戸内町古仁屋	92.3	39.5	12.0	54	43%
69	1423	フタツマタ	奄美市住用町和瀬	98.0	24.0	12.0	60	24%
70	3776	フタツマタ	大和村国直	103.5	25.5	11.0	50	25%
71	2843	ヌクエー	喜界町荒木	105.4	29.0	10.5	65	28%
72	2772	フタマタ	喜界町川嶺	88.0	32.0	11.5	70	36%
73	270	二又	南大隅町根占川南	131.6	24.0	9.0	85	18%
74	3398	フタマタ	薩摩川内市里町里	66.0	36.0	9.5	28	55%
75	3407	フタマタ	薩摩川内市上甕町桑之浦	75.0	39.5	8.8	34	53%

小野の指摘を踏まえるならば、備中鞆同様に、表一の甕島の風呂鍬（整理番号43）が長島地域と熊本県天草地域の風呂鍬と似た傾向を示すことは注目される。ただし、実測した資料が一点のみであることから、今後の課題としておきたい。

おわりに

以上のように、本稿では当館収蔵資料の実測をもとに鹿児島県内の風呂鍬の地域性について、主に種子島、長島の地域の風呂鍬の特徴を見てきた。筆者は、敢えてこれを新しい見解とせず、「確認」と表現した。それは、資料の実測から得られた結論が、先行研究でも大まかには指摘されているところで、各地域の集落・民家を隈無く訪ね歩き、鹿児島県の農具を見てきた先学たちにとって、経験的かつ感覚的に知っている「当たり前」のことであつたからである。

しかしながら、ここで臆せずに述べると、筆者は、先学の蓄積した優れた研究に学ぶなかで、一種の違和感を覚えることもあつた。それは、先行研究で述べられていることの中には、数多くのフィールドワークの中で見聞きして培つた研究者個人の経験を根拠とした感覚的な実感でもって、資料を論じているものが少なくないということである。優れた研究者の感覚的な実感は、真実的を射ている場合が多いように思うが、客観性は伴わない。筆者は、学問を共有する上で、経験や感覚を根拠としない客観性こそ必要と考え、より客観的な数値をもとに農具を分析することに努めた。結果として、先学の経験的・感覚的な実感の一部を科学的に実証し、再確認したに過ぎないが、本稿で確認してきた作業は、先行研究を批判的に検証する方法論と成り得るものと考えている。

伝統的な農業生産に用いられてきた農具が、次第にその姿を消していき、それを使用していた農家の高齢化も進んでいる。また、ホームセンターなどで売られている画一的な農具や農業機械が主流となつている現在において、たとえ

「コロナ禍」ではなくとも、集落や民家を訪ねての資料調査で伝統的農具やその聞き取りを行うことはますます厳しい状況にある。筆者もフィールドワークこそ研究の基本であると考え、地域の博物館、資料館が収集してきた実物資料を、今一度調べ直し、収蔵庫内の資料を調査することは、今後の研究において必要なのではないだろうか。その作業は、先行研究を検証することにもつながるものと確信する。

今後、農具に限らず、当館収蔵庫及び県内各地で民具の実測調査を行ない、基礎情報を蓄積しながら、それぞれの民具のもつ地域性についての検討を進めたい。諸賢の忌憚のないご批判とご教示をいただけたら望外の喜びである。

註

(1) 会期は令和二年九月八日〜令和三年一月十七日。この展覧会では、一年の農事サイクルの中から、耕起や整地に関わる「耕す」、作物の播種や植付に関わる「蒔く」、収穫や脱穀に関わる「穫る」の三つを柱として、かごしまの伝統的な農業の営みを紹介した。

(2) 調査成果の一部は、以下の計十四冊の民俗資料調査報告書として刊行されている。『奄美諸島・種子島・屋久島民俗資料調査報告書』（鹿児島県明治百年記念事業事務局、一九六九年）、『甕島・長島有形民俗資料調査報告書』（鹿児島県明治百年記念館建設調査室、一九七〇年）、『トカラ列島有形民俗資料調査報告書』（同、一九七一年）、『霧島山麓（始良郡北東部）民俗資料調査報告書』（同、一九七二年）、『大隅半島南部民俗資料調査報告書』（同、一九七三年）、『薩摩半島南部民俗資料調査報告書』（同、一九七四年）、『北薩地区有形民俗資料調査報告書』（同、一九七五年）、『大隅半島北部有形民俗資料調査報告書』（同、一九七六年）、『大隅半島東部有形民俗資料調査報告書』（同、一九七七年）、『川内川上流地区

有形民俗資料調査報告書』(同、一九七八年)、『薩摩地区有形民俗資料調査報告書』(同、一九七九年)、『曾於北・始良地区有形民俗資料調査報告書』(同、一九八〇年)、『薩摩半島東部地区有形民俗資料調査報告書』(同、一九八一年)、『日置地区有形民俗資料調査報告書』(同、一九八二年)。

(3) 鹿児島県内の農具研究の基本的な文献として、小野重朗『南九州民具図帖』(私家版、一九六六年)、同著『南九州の民具』(慶友社、一九六九年)、同著『民具の伝承 有形文化の系譜(下)』(慶友社、一九八五年)、鹿児島民具学会編『かごしまの民具―鹿児島民具博物誌』(慶友社、一九九一年)、上江洲均・神崎宣武・工藤員功『琉球諸島の民具』(未来社、一九八三年)などを参照した。

(4) 宮本馨太郎『民具入門』(慶友社、一九六九年)一五四―一五五頁。農具の名称について、本稿では、『国際常民文化研究叢書六―民具の名称に関する基礎的研究―「民具名一覽編」』(神奈川大学国際常民文化研究機構、二〇一四年)を参考にし、なるべく広域的な視点で比較可能な名称を使用する。個別の資料の名称については、黎明館の登録資料名を基本とし、資料収集時に確認された固有の呼称がある場合は、資料登録カードの記載に従った。ただし、方言の文字表記は統一していない。

(5) 堀尾尚志・飯沼二郎『ものと人間の文化史十九 農具』(法政大学出版会、一九七六年)一〇八頁。

(6) 前掲注(4) 宮本書。本稿では、文献等の引用を除き、風呂鍬の「風呂」部分を「台」と表記する。

(7) 川野和昭『南九州・鹿児島県の民具』(『国際常民文化研究叢書九―民具の名称に関する基礎的研究「地域呼称一覽編」』神奈川大学国際常民文化研究機構、二〇一五年)二二二―二二七頁、同著『鹿児島県の民具名称―広域的比較研究を目指す試み―』(前掲研究叢書)二九七頁。なお、下野敏見は「オデ」の語源を「ウデ」(腕)とする説を唱える(下野著『南日本の民俗文

化誌十一 南日本の民俗文化誌』南方新社、二〇一二年、二九七頁)。

(8) 鹿児島県内の風呂鍬には、奄美諸島で「トチムン」などと呼ばれる田打鍬も含まれると考えられるが、台の後端と柄の下部をつなぐつかい棒を取り付けた構造となっていることから、今回の分析対象からは除外した。

トチムンは、柄と刃の角度が八十度ほどある典型的な打ち鍬である。前掲注(3)『南九州の民具』七十三頁、『かごしまの農具』二十四―二十五頁。
(9) 実測に当たり、神奈川大学日本常民文化研究所編『神奈川大学日本常民文化研究所調査報告第十三集 民具実測図の方法Ⅰ―農具―』(平凡社、一九八八年)を一部参考にした。本稿に掲載した実測結果は、『鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵品目録(Ⅲ) 産業Ⅰ』(一九八六年)に記された法量と数値に異同が認められる。これは、記載の誤りではなく、計測基準の相違によるものである。

(10) 刃や台の形状、刃や柄の反りの角度、重量なども風呂鍬の機能に関する重要な要素と考えられるが、本稿では割愛した。今後の課題としたい。

(11) 表の台帳番号は、黎明館の資料登録カードの番号である。使用地域は、収集時に資料が使われていた所在地を基本とし、現在の市町村名を記している。可能な範囲で大字等を表記し、平成の市町村合併により旧市町村名が残っていない場合は、「肝属郡高山町↓肝付町(旧高山町)」のように表記した。資料の配列は、市町村ごとにまとまりをもたせて並べた。備考一で、刃の先端の形状が丸いものを「マムシ頭型」と表記した。

(12) 下野敏見『種子島の製鉄および鍛冶技術』(『鹿児島民具』第三号、一九八二年)十九―二十頁。

(13) 前掲注(3)『かごしまの民具』六十五頁。

(14) 下野敏見『南日本の民俗文化誌十二 南から見る日本民俗文化論』(南方新社、二〇一〇年)二五四―二五九頁。

(15) 前掲注(3)『南九州民具図帖』三頁。

(16) 『鹿児島県出水郡東町有形民俗資料調査報告書』（東町教育委員会、南日本文化研究所、一九七一年）十四頁。

(17) 備中鍬は、二本から四本の刃をもつ股鍬で、「ヒツ」と呼ぶ柄壺に差し込む風呂無鍬である。実測に当たっては、概ね風呂鍬と同様の方法で計測した。柄の長さ（A）：資料を側面から見て、柄の上辺に連なる柄壺の底部から柄の先端を直線で結んだ長さを計測した。刃の長さ（B）：刃の先端から柄壺の後端までの長さを計測した。刃の幅（C）：幅の最大値を計測した。柄と刃の角度（D）：刃先の前方部を床面と水平に置き、柄の付け根の中央部の角度を、建築用勾配目盛を使用して計測した。

(18) 引用は、小野重朗の記録した「資料調査報告カード」（資料名「ミツマタ・フタマタ」一九六九年七月、薩摩郡上甕村瀬上）の所見。熊本県宇土市の「ミツマタグワ」について、前掲注（3）『南九州の民具』七十頁。

（おの きょういち 学芸課主事）